



ちょっとそこまで ～お散歩日和（名言編）～



けれども、この何年かの、
起伏に富んではいても何の精彩もないわたしの生活には、
彼女と心が通い合うようなことは何ひとつなかった。

…… イーヴリン・ウォー

何かと忙しい忙しいと声高に訴える人がいます。忙しいのですから、それはそれで仕方がないのですが、その中に、楽しそうな人と苦しそうな人がいるのはどうしてなのかなと思います。

一般論ですが、それは仕事に向き合う姿勢の差のような気がします。そもそも仕事自体に面白いとか、つまらないといった違いはありません。ですから、絶対に「面白い仕事」と「面白くない仕事」というのが存在するわけではなくて、「面白そうに仕事をする人」と「つまらなそうに仕事をする人」がいるだけだと思います。つまり、面白い仕事が最初から存在するものではなく、人が創り出すものだと思います。もっと言えば、とんでもなく退屈そうに見える不人気の仕事を、感動で涙が溢れるような仕事に変換していくことこそが妙味だと思うのです。

その典型が、NHK「プロフェッショナル～仕事の流儀～」でも取り上げられていた、羽田空港の清掃員新津春子さんであり、ゴミ収集員岳裕介さんでしょう。誰もが嫌う仕事を見事に誇り高く、カッコいい高みの存在へと押し上げていました。そこにあるのは、どこまでも手を抜かず、あわてず、自らが納得できるまで堅実に積み重ねていく愚直さであり、精神性の深さです。

「雑用の法則」と呼ばれているものがあります。それは、嫌だからと言って雑用から逃げ続けると、一生その雑用に追われ続けることになるというものです。確かに、これには例外がないようです。雑用とは少し違いますが、気持ちの上では雑用なのでしょう。子供たちを見ているとよく分かります。宿題から逃げてラッキーと思っている子がいます。ところが、その時逃げた宿題があの手この手で必ず時差を経て自分の身に降りかかってくるのです。

その反対に、

「下足番を命じられたら、日本一の下足番になってみろ。そうしたら、誰も君を下足番にしておかぬ。」

というのがあります。これは阪急電鉄創業者・小林一三の有名な言葉です。身の回りの仕事や用事のことを雑用だと嘆く人は、自分自身の一つ一つの仕事に対する考え方やスタンスを一度見直してみることが肝要なのです。

ただ、本来の言葉の意味はわきまえておくべきだろうと思います。つまり、「雑」とは「いろいろなことが入り混じっていて純粋ではないこと」です。その多くが、本来の業務と比較すると、明らかに余計な仕事に思えるようなことです。誰かの電話を受けたり、机の上を片付けたり、ファイルを整理したり、メールを既読にしたり……こういったいろいろな用事や務めを「雑用」とか「雑務」と表現しています。



しかし、この「雑」にはもう1つの意味があるから困りものです。「粗末で、いい加減なさま」です。そのため、「雑用」を「雑」と「用」に分解し、「取るに足らない些末な用事」と受け取ってしまうのです。

では聞きますが、お正月にいただく「雑煮」はどうなるのでしょうか。丁寧に作られなかった雑な餅入りの煮物が「雑煮」なののでしょうか。「雑誌」はどうでしょうか。いい加減に作られた出版物なののでしょうか。

まあ、恐らく「雑用」を蔑ろにする人が多いので、戒める意味でこのような「言い換え」をしているのでしょうが、言葉とは、いつの日か本当にそういう意味になってしまうので、気を付けた方が良いでしょう。その典型が雑草や雑魚です。いろいろなものが入り混じっていることを意味していたのが、気が付けば、軽く扱うだけでなく、時には邪魔者扱いさえする始末です。言葉とは極めて危険な要素をもっているのです。

ところで、私が子供の頃、岡山市内を見下ろす山腹に「池田動物園」があって、憧れの観光スポットでした。ちょうどその頃は、岡山藩主の末裔と昭和天皇の娘が結婚した頃でもあり、何度か訪れたことがあります。そこには、回転展望台があって、都会ってすごいなあと感じた記憶が微かにあります。

その池田家の菩提寺である曹源寺も市内にあるのですが、これがまた見応え十分の伽藍で、岡山を訪れることがあったら、後樂園だけでなく、少し足を延ばして訪問しても良い古刹ではないでしょうか。そこに、こんな逸話が残されています。

明治の初め、京都嵐山の天龍寺の管長になられた滴水（てきすい）宜牧（ぎぼく）禅師は、修行時代を岡山曹源寺の儀山（ぎざん）禅師の下に過ごします。ある日の夕方、師が入浴中、滴水に問います。

「わしが風呂から出たら水をどう始末するのか。」

「老師の次の人が入ります。」

「それがすんだら。」

「私たち小僧たちが入ります。」

「それがすんだら。」

「捨てます。」

答えるが早いか、儀山の大喝一声が飛んでまいります。
「バカモノー、なぜ木の根にかけぬ。一滴の水をも粗末にしてはならぬ。」



「曹源の一滴水」とは禅問答によく登場する禅の根本を言い表した言葉ですから、ここで言う「曹源」とは「曹源寺」のことではありません。おそらく、この逸話は分かりやすく脚色したものでしょう。が、このエピソードもまた、どんな仕事にも細かく配慮することが大切なのだと教えてくれているように思います。

つまり、たった一滴の水でも、途切れることなく注げばいつか小川となり、やがて大河となっていくという譬えを、この言葉が象徴しているのです。どうしても伝えたい、そして、受け取って欲しいと願う思い、そんな一滴があれば、それはやがて大きなうねりとなって、いつかどこか誰かに届くという考えです。



そういう精神性に至れば、雑用と呼ばれるものは世の中に一切ないことにも気付くはずです。「用事を雑にするから雑用になる」とは昔から繰り返しく言われてきた言葉ですから。

さて、冒頭の言葉は、イーヴリン・ウォーの「回想のブライズヘッド」からの引用です。「ブライズヘッドふたたび」とか「情愛と友情」というタイトルで映画化・ドラマ化されているので観たことがある人もいるかも知れません。簡単に言えば、貴族であるセバスチャン一家が衰退していく悲哀を、庶民チャールズの視点を通して描いた物語です。イギリスのドラマにはこういう貴族趣味の類が多いよなあと思いつつ、不思議と見入ってしまいます。お勧めです。

(終)